

素人小説

第 12 回「新米経営者の勉強」



株式会社 BSO

1第12回「新米経営者の勉強」

- ・ これまでの上西
- ・ 突然の事業継承
- ・ 無知な経営者
- ・ 露頭に迷う
- ・ 答えを探す日々
- ・ 情けない自分
- ・ 応えてはくれない本
- ・ 偶然の出会い
- ・ 頼もしい松坂のアドバイス
- ・ 経営者として成長出来る場

これまでの上西

上西は関東の私立大学の工学部を卒業した。工学部卒で証券会社に勤めることはさほど珍しくなくなったが、上西は何か考えがあつて証券会社を選んだ訳ではなかった。下宿先の仲の良い学生が証券会社に行くことに感化され、その学生と一緒に入社試験を受けたら合格し、他にこれという会社も無かったので、そのまま入社したものでしかなかった。

突然の事業継承

大手証券会社のサラリーマン4年生であつた上西は、親父の他界で事業を引き継ぐことになつた。上西は父親と事業継承について話したことは無かつた。むしろ、上西は親父の会社を継ぐことをまったく考えていなかった。

突然の登板である。子供の頃から育つた場所であるし、帰省する度に見ていた工場であるが、いざ経営するとなるとまったく異質の場所であり、見るもの聞くものすべてが初めてと感ずることが不思議だつた。

しかし、そのような精神的余裕はすぐに無くなり、毎日毎日があつという間に過ぎ去つていった。

無知な経営者

上西は経営の勉強をすることになるとは考えたことも無かった。親父が勉強している姿も見なかったし、そういった話を聞いたことも無かった。

よく分かっていない自分に対して、社内外からは一経営者として向かってくる。自分の発言を待っている。しかし自分の対処や判断が妥当かどうか全く分からないままに、めちやくちやに対応している。自分が情けなかったし、怖くなった。

上西は事業を引き継いでしばらくして、指示されて動くことに馴れている親父の番頭達に囲まれて過ごす毎日が怖くなっていった。彼らに頼る経営は出来ず、兎に角、自分が何とかしないとどうにもならない状態にあることを目増しに思い知らされ始めた。

路頭に迷う

上西はどのように経営して良いのか分からなかった。かといって、社内に相談をもち掛ける気にもならなかった。上西は親父の代から一応顧問になってもらっている歳をとった税理士の先生に悩みを少し話した。しかし、答にならないような答弁を胡散臭そうに機械的に返事するだけで役に立たなかった。

大学の同級生の中に何人か若くして経営者になっている者がいた。上西は彼らに救いを求めようとした。親父の事業を手伝っている者、親父の事業を継ぐべくして継いだ者については、経営の実感が無く、社交的なことに関心が強く殆ど役に立たなかった。自ら創業した連中は全員忙しく、自分のことで精一杯という感じで、親身に相談に乗りたくない気持ちに伝わってきたが、そんな余裕が無かった。

答えを探す日々

新大阪の新幹線中央改札口を入ったところに小さな本屋がある。新幹線をよく利用する上西であったが、この本屋には今まで気付かなかった。大体、本屋などというところには学生時代ですらあまり立ち寄ることもしなかった。しかし、この小さな本屋が上西の目の中に大きく飛び込んできた。15分ほどの待ち時間があったこともあり、飢えた馬鹿な魚が餌を見つけてわき目も振らず食いつくような感じで、上西はその小さな本屋の本棚を覗き込んだ。

どんな本を読んで良いかも分からず、兎に角「経営」という名の付く本を4冊買いこんだ。博多の駅に着くまでに、自分でも驚くほどの猛スピードでちょうど読み終えた。

本とは偉い先生や先輩が書いたものだから役に立つことが書いてあるだろうと漠然と

考えていた。きっと今の自分の悩みを解決してくれるところが出てくると。しかし、一冊目にはなかった。2冊目にはきつとあるとだろうと読んで3冊目、4冊目も同じだった。この今回の4冊の中でも出会えることができなかった。上西は頭を切り替えて、福岡支店長の高木と博多駅で落ち合い商談に赴いた。

情けない自分

商談は高木のペースで全て進んだ。時々高木が上西の方を向いて話すので、そのときだけは態度で相槌を打つように心がけたが、上西はただ同席しているだけであった。自分でも、自分の役が齒擦かった。明日までかかると言われていた商談はその日で決着がつき、会食も和やかな雰囲気の中かで無事に終わった。皆と別れるとき、高木から久しぶりに来たのだから福岡支店の運中に慰労の言葉でもかけてくれるように懇願された。しかし、その要請に応えられる自信が無のまま、翌日早朝に大阪に帰ることを高木に告げてホテルに戻った。

商談の時の自分といい、会食の時の自分といい、高木の懇願に応えなかった自分といい、上西は自分が情けなかった。ホテルのベッドがひどく柔らかいせいもあるのか、その夜は殆ど寝れなかった。ウトウトしながら朝の新幹線に乗った。出張からの帰りとしては珍しく早い時間の9時10分に大阪の本社に入った。予定のない今日、本屋に行くことに決め、

自分の秘書役を兼務してくれている総務部長の山本に告げて会社を出た。

応えてはくれない本

梅田の本屋に入った。関係がありそうな本を片っ端から立ち読みした。気付いたときはもう午後一時を回っていた。3時間ほど経ったことになる。何冊の本に目を通したか分からない。

まだ自分の悩みや疑問などに真正面から答えてくれる本は見つからない。「帯に短し襷に長し」で、上西はイライラし出してきた。なぜなのだろう。自分の今の悩みは、特殊なのかとも思った。

遅い昼飯を梅田の地下街で済ませながら、空腹が収まったせいも、少し余裕が出てきた。上西は昨日今日で沢山の本を読んだにもかかわらず、なぜ求めているものがないのか考えた。経営者が勉強するための本は、ハウツー的なものではない。常日頃幅広く読み、いろいろな知識を身に付け、その知識を持って自分で解決策を考えなければならないという事が分かった。結局、本の著者は上西のために書いていないのである。本を読むことは今の自分に即効性のある解決策にはならないという事が分かった。今後、読書の習慣を持つことを決め、環状線に乗るために大阪駅に向かった。

偶然の出会い

上西は妻 佳代の反対により、工場の隣にある実家に住むことをあきらめた。生駒のニュータウンに住むようになり、工場の近くにある商店街に行くことは無くなっていた。

本屋からの帰り、本社がある弁天町で上西は電車を降りた。本社ではなく、足が商店街に向いていた。子供のときからすると、大分寂れたという感じを受けながら、6、700メートルほどしかない商店街を歩いた。

歩き出して2、3分経った頃、後ろで声をかけられたような気がして上西は振り返った。笑顔でこちらを見ている男の人がいた。「上西、上西じゃないか」と問い掛けてきた。声には聞き覚えがあったが、上西にはその人が誰だか分からなかった。上西が怪訝な顔をしていると、その人は「俺だよ俺、松坂だよ」と言った。そう言われても上西は思い出せない。「アーチエリーの松坂だよ」と言われて上西は、初めて高校のクラブの先輩の松坂さんである事が分かった。

上西は松坂のことは大学卒業後、親父の会社を引き継いだことを風の便りで聞いたが、これまで交流が全くと言って良いほどなかった。しかし、それ以上に松坂の風貌の変わり

ようが凄かった。松坂は上西より2つ上だが、5、6歳も上に感じさせた。また、高校時代はスポーツマンらしくほっそりして、神経質な青年だった。

頼もしい松坂のアドバイス

松坂の名刺には、「松坂電子工業株式会社 代表取締役」となっている。松坂は潰れかかっていた親父の会社を立て直し、鉄工所から電子機器の製造に業種転換し、いま時流のなかにある。

まだ5時にはなっていないが、二人は商店街のはずれにある立ち飲み屋の暖簾をくぐった。こんな処で飲むのももう長らくなかったが、特に違和感もなく二人は常連のように、まだ客がいない店の隅に席を取った。

久しぶりの再会ではあったが、上西は藁をも掴む気持ちで、松坂に自分の悩みを打ち明けた。上西は一方的に話した。松坂は高校時代と同じように真剣に話を聞いてくれた。「アドバイスになるかどうか分からないが、自分の経験が参考になるかもしれない」と言いながら、倒産しそうだった親父の会社を再建するにあたって、障害をどのように乗り越えたか、また社員の猛反対の中でどのように業種転換に取り組んだか、経営者としての経験を話してくれた。

上西の悩みに対する直接的な答えではなかったが、松坂の経験談は上西の悩み事に比べると数段上のことであり、色々と勉強になった。少し熱爛気味の Copp 酒が物凄く美味く、気持ちよく酔えた。

経営者として成長出来る場

大阪商工会議所に異業種交流プラザというのがあるが、一緒に行かないかと松坂から誘いがあったのは、それから3日後の夕方であった。上西は自分の現在悩んでいる事を知つての誘いに無性に嬉しかった。

早速参加した。コーディネーターの講話は、経営者としての勉強、現代の経営についての話である。またコーディネーターと経営の諸問題について、それぞれ自由に色々な話をしている。二次会では悩みを持つているメンバーがトントン酒を飲みながら本音で語っている。上西は途中入会ではあったが、初回はのめり込むように話を聞いていた。松坂に感謝しながらも、経営者として成長する場が見つかった事が嬉しかった。